
アーキタイプ・ストーリー ～ Archetype Story ～

伊耶那岐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーキタイプ・ストーリー 〈Archetype Story〉

【Nコード】

N10900

【作者名】

伊耶那岐

【あらすじ】

老賢者スサノオが深い瞑想から導き出したこの世の神秘を、永遠の少年スクナに向かって解き明かす哲学的ノベル。

純粹無垢な少年は、その魂の純粹性故に、人生の苦難に遭遇し、迷いが生じる。

そうした時に、運命の老人は必ずや現れて、深い智慧と秘技をけん。

ヨーガ行者でもある著者が綴る心身と魂の世界観をお楽しみください

い。

神道瑜伽八十八世行者・伊耶那岐

これはフィクションであり、ファンタジーの世界です。現実世界を決して見失わぬようお読みください。

老賢者から永遠の少年への伝言

老賢者スサノオが深い瞑想から導き出したこの世の神秘を、永遠の少年スクナに向かって解き明かす哲学的ノベル。

純粹無垢な少年は、その魂の純粹性故に、人生の苦難に遭遇し、迷いが生じる。

そうした時に、運命の老人は必ずや現れて、深い智慧と秘技をけん。ヨーガ行者でもある著者が綴る心身と魂の世界観をお楽しみください。

神道瑜伽八十八世行者・伊耶那岐

これはフィクションであり、ファンタジーの世界です。現実世界を決して見失わぬようお読みください。

存在の理由

スクナ「お師匠様、ボクはどこからきたの？世界はどうやってできたの？」

スサノオ「さあね、それは私にもわかんないな。だからこそ、宗教つてもものがあるんだけどね」

スクナ「宗教？」

スサノオ「そうさ、宗教だよ。どれだけ科学が発達しても「人間もしくは生命がなぜ存在するか」というのは永遠の神秘なんだ。例えば全地球生命・人類が滅亡しても宇宙にとっては痛くもかゆくもないだろ？」

スクナ「うん」

スサノオ「だけど情情的には、生命とはかけがえないものだろ？」

スクナ「そんな感じがする・・・」

スサノオ「人間には理性があって理性が科学をつくったんだけど、感性つても存在するんだね。例えば誰かが死んだら悲しいだろ？」

スクナ「悲しいですよー。お師匠様が死んだら泣いてしまいますー」

「

スサノオ「悲しんでくれるのかい、ありがとよ。けど悲しむことはないんだ、生命には終わりがあるけど、魂は永遠に不滅でまたスクナ、お前とも会うことができるからね。」

スクナ「ほんと？」

スサノオ「そうきくとさつきよりは悲しく感じなくなるだろ？」

スクナ「えー、お師匠様、嘘をついたんですかー、意地悪。」

スサノオ「嘘というか、方便というかなあ、これは心理学の問題でもあるんだけどね。死後の世界、魂の永続性、輪廻転生というものを立ててそれを癒すんだ」

スクナ「ふむふむ」

スサノオ「人間つてのは悲しみに耐えられるほど強い生き物じゃない

んだ、わかるかい？スクナ」

スクナ「うんうん、そういうを乗り越えて生きていかなきゃいけないね！」

スサノオ「そうだね。けど人間は無目的ではなかなか生きれないんだ。」

スクナ「人間はどこからきて、どこに向かっていくの？どう生きたいの？教えてください、お師匠さま！」

スサノオ「この世は神がつくったんだよ、この世は魂を向上させる修行の場であり、最後は輪廻を抜けて神と合一するんだ」

スクナ「ほんと？？」

スサノオ「さあ、どうだろねw」

スクナ「また嘘をついたんですか？お師匠様、いじわる。」

スサノオ「こんなことを考えて話していると無限に時間をとられて、生きることができなくなるだろ？だからまず、今やるべきことをしっかりやるんだね。今できる精一杯のことをするんだ。それが生きることだね。そしてそこで色々な経験をして、まず生きることを実感し、そしてそれぞれの生命観を考えていけばいいさ。」

スクナ「はい！お師匠様！」

スサノオ「今の若者は自分探しをしようとしてるけど、自己というのは重層的なもので、社会と切り離して考えてはいけないんだ」

スクナ「知らない土地に旅をしたりするとかのアレですか？重層的？」

スサノオ「まあ、現実社会だけの生活をするエネルギーが消費するから、リフレッシュのために旅行とかするにはいいんだけどね」
スクナ「ボクも旅行は大好きです！今度、お師匠様、つれていってくださいよー！」

スサノオ「お前がちゃんと日常生活と社会生活をして、社会の人のために貢献していれば、ご褒美につれていってあげるよ」

スクナ「わーい」

スサノオ「よく聞くんだったスクナ。この世は人はなんで今、自己が存

在するかというとても重要なことに蓋して生きているんだ。これは仕方のないことなんだけど。ここが宗教の重要な役目で、宗教では神や仏を立てて一定の教義によって解き明かしていく。けど、これも限界があるんだね。けど限界を感じつつもやはり何かを立てないと人間ってのは不安であり、やはり自分探しとかに走ってしまうんだね」

スクナ「なるほど・・・」

スサノオ「このことはまた、どこかで話すとして、重層的というのは、スクナはお母さんから見たら子供だし、お兄さん・お姉さんから見たら弟だし、社会から見たらまだ学生だろ？だからスクナという人体に「スクナ」という名が張り付いており、そこに子供・兄弟・社会的地位などのペルソナが張り付いてくるんだね。そうやってスクナってのは周囲からつくられるんだ、スクナってのはその総称であり、すべてがお前なんだよ」

スクナ「名とか地位とか全てを取り去って本当の自分が見えてくるんじゃないですか？」

スサノオ「どうなんだろね。たまねぎの皮を全部むくと、最後には何もなくなるだろ？」

スクナ「うん」

スサノオ「それと同じで、全部そういうのを取ってしまったても何も残らないんじゃないかな」

スクナ「魂とか霊とかが残るように感じるんですけど・・・」

スサノオ「そういうのが心靈主義、スピリチュアリズムっていう思想なんだよね。これは物質主義の反動でできたようなものなんだけど、これも極端な思想だね。もちろん魂や霊というものを認めてもいいと思うんだ。だけど、偏ってしまうのはよくないね。」

スクナ「中庸とか中道ですか！」

スサノオ「そうだね、そういうバランス感覚は大切だ。現代は身体を忘れてしまっているように思うんだ。科学を発達させ身体的活動を物質に投影して機械文明をつくり、その反動で今度は靈魂のみの

世界ができ……。もちろん、身体のための偏りも駄目だね。」

スクナ「バランスなんですね！」

スサノオ「そうなんだ。それを踏まえた上で、私がお前にこれから形而上学的な世界とこの世のことについて悟ったことを教えていこう。これは瞑想から導きだされた直感的思考であり、単なる哲学ではないんだね。頭だけの働きではなく、身体的技法と精神作用とを駆使した秘技なんだ。それらをこれから、スクナ、お前に開示していこう」

スクナ「よろしく願います！」

輪廻転生の秘密（前書き）

ここに転生の秘密を解き明かそう・・・。

輪廻転生の秘密

スサノオ「今日は輪廻転生について話そう」

スクナ「生まれ変わりのことですね！興味あります！」

スサノオ「スクナは生まれ変わりを信じるかい？」

スクナ「信じていますけど、信じているって言われるということは
お師匠様は生まれ変わりを疑っておられるのですか？」

スサノオ「こういうものは人知では知ることができないものなんだ。
だけど、ファンタジーとしてはあってもいいね。」

スクナ「ファンタジーですか」

スサノオ「死という状態を人間はもつとも恐怖する。だから死後の
世界や生まれ変わりを想定すれば、死というものは靈魂の変容でし
かない、と思えてくるだろ？」

スクナ「なるほど、そこで終わりと思ってしまうと怖いけど、魂が
あって、それが永遠に続くんだと思うと少しは怖くなくなるような
気がします」

スサノオ「けど、ここには問題が発生するんだ。この世は一切が皆
苦であり汚辱に塗れた世界とすると、逆にあの世ってのは極楽の浄
土としてのイメージが投影されてくるんだね。」

スクナ「極楽浄土！そんな世界が存在するんですね！」

スサノオ「さあね、私もそうだけど、この世では誰も死んだ人がい
ないからわからないね。けど、極楽浄土を想定すると喜び勇んでそ
こへ飛び込んでいけてしまう、これも危険なんだね。だからカルマ
という魂の情報を想定しておき、その情報操作をうまく行う必要が
あるんだね」

スクナ「業ってやつですね！スクナは悪いことしていませんから、
必ず極楽浄土にいきますよ！」

スサノオ「それは良い心がけだね。現世でしっかりと精進していれ
ばきっと浄土にいけるとか、来世がよくなるとかしておこう。とま

あ、今までの話は前置きとして、本題に入ろう」

スクナ「お師匠様、前置き長いですね！」

スサノオ「歳をとると話が長くなるもんでね、今年で2483歳になるよw」

スクナ「凄いお歳ですね、けど姿形は若いままなんですネ！」

スサノオ「神仙術と瑜伽行をしておればどうってことないね、歳つてのは。ただ、数えが多くなるのは嫌だなwまあ、それは置いておいてだな。」

スクナ「はい！本題ですね！」

スサノオ「全ての生命の発展は、反復して加上されるんだね。」

スクナ「なんですか、それ？」

スサノオ「つまり、スクナの人生の半生は、前世の一生をやり直しているのさ。例えばスクナは音楽が好きで10歳からはじめるとする。次に踊りを踊ることを15歳でするとする。そうするとこれは、例えば、前世の一回目では一生をかけて歌を追求し、二回目の前世では音楽を追求したかもしれない。そして現世では25歳以降に踊ることを学び、35歳以降では前世で学んだ歌と音楽を現世で学んだ踊りと融合させて新たな分野を創造するかもしれない。これが「現世の半生 は、前世の一生を反復する」ということなのさ」

人間50年の時代の半生を想定し25歳とここではしておく。

スクナ「ほんと？」

スサノオ「さあね、これは私の直観さ。先ほどのカルマの話じゃないけど、人生の苦難にあつて、そこで自殺しても、また来世では同じような苦難に遭遇するんだね。苦難は成長の種であり、それを乗り越えて成長しなければならんだ。とまあ、こんな話になっていくんだけど、これらの人生反復説はまったく根拠のないことでもないんだ」

スクナ「是非、その根拠を知りたいです！」

スサノオ「じゃあ、話そうか。全ての生命ってのは、それまでの生命進化を反復して発展するという法則があるんだ。これをヘッケル

という学者は「系統発生は個体発生を繰り返す」と述べている」

スクナ「ああ、そういえば、人間もお母さんのお腹の中で魚みたい
にエラができたとか動物の段階をやり直してゐるのは聞いたこ
とあります！」

スサノオ「そうだね。そしてそれだけじゃなく、赤ちゃんは生まれ
てから立ち上がるまでに、魚の運動や四つ足動物の運動とかを繰り
返しているんだね。」

スクナ「そう言われれば、腹這いなんかは、生命が海から陸にあが
っていくような状態に見えますね」

スサノオ「そして、恐らく人生というものも同じで、ヒト科の成体
は25歳とされるんだけど、25歳までは前世で経験してきた全
てのことをやり直すんだ。まあ、成体となるのに個人差があるから、
25歳前後と見るんだけど、それより後になつて経験することは、
一つは新しい学び、もう一つは今まで学んだことを総合していくこ
と、ではないかと私は直観している」

スクナ「なるほど、それはありえるかもしれませんが。じゃあ、25
歳までに結婚したら、前世からの愛による結婚になつてなかなか口
マンチックですね！」

スサノオ「もの凄く尻にしかれたりしてなw」

スクナ「えー、怖いよー！けど最近は晩婚化が進みましたが、以前
は結婚は25歳くらいまでにするって観念がありますけど、25歳
成体説とそれまでの因縁が強いと考えると、それも納得できるよう
な気がします！」

スサノオ「晩婚化というのをどうみるかだね。それは新たな意識改
革と見るのか、それとも前世からの気づきが得れない時代になつて
きたと考えるか」

スクナ「ふむふむ・・・」

スサノオ「話を少し戻そう。成体になる前に前世での学びを経験で
きない方も恐らくはいるだろね」

スクナ「もしかすると、それが自分探しをするという原因になると

いうことですか？」

スサノオ「そうかもしれないね。まあ、それは置いておいて、とりあえず教育というものは、その子にとってのきっかけづくりとしての学びの場とならないといけないんだ。つまり、この法則に従うなら、前世で体験してきたことをそのまますぐに反復していけるようなシステム、更にそれ以前に、自己に気づきを与えられるようなシステムづくりが必要なんだ。」

スクナ「今の画一的教育や偏差値重視の教育じゃ、そんなのできませんよね」

スサノオ「ある程度の統一性と論理的思考や努力を計る指標として偏差値教育もいいと思うんだけど、人間に与えられたパラメータというのはそれだけじゃないんだね」

スクナ「パラメータですか？音楽力とか舞踊力とか？」

スサノオ「そんな具体的なものじゃないんだ。この根本的パラメータのことはまたどこかで後述しよう。」

スクナ「え？もう終わりなんですかー！じゃ、その時を楽しみにしています！」

寿命の秘密

スサノオ「『一日一生』って言葉を知っているかい？」

スクナ「はい！」

スサノオ「一日は貴い一生である、これを空費してはならない。という尊い教えだね。」

スクナ「そう思って生きることになります！」

スサノオ「この一日ってのは転生論からすると、『前世の一生』なんだね」

スクナ「え、そうなんですか？」

スサノオ「ヘッケルの反復説を拡大解釈した論理にあてはめるところなるんだ」

スクナ「なるほど。」

スサノオ「とすると、『眠る』ことというのは『死』と同等の意味になる」

スクナ「確かに死ぬことを永眠とってはいいますもんね！」

スサノオ「この論理でいくと、長生きした方というのは転生をそれだけ多く繰り返したことになるね」

スクナ「はい、そうなると思います」

スサノオ「死というのは一つの魂の浄化なんだね。魂には煩惱という汚れがつきまとうから、これを死という状態で浄化するんだ。それとともに魂が学習したことは宇宙の図書館であるアカシックレコードという場所に保管されるんだ」

スクナ「ほんとですか？」

スサノオ「と、神秘家なんかは説明するんだろうけど、神秘家じゃないにしても、どうもこの世は一つの学びの場のような気がするんだね。」

スクナ「ボクもそういう気がします。そして、こういう勉強は大好きです！学校の勉強は全然駄目ですけどw」

スサノオ「老人になると精力が衰えるから煩惱もそれだけ減っていく。だからまず長く生きるということは魂の浄化につながるかもしれないんだね」

スクナ「けど、お師匠様の言われることに従うのでしたら、人間の寿命は前世から決まってるってことになりませんか？」

スサノオ「いいところに気がついたね。だから健康法をやるうと何をしよう、恐らく死ぬ時期ってのは決められているんじゃないかと私なんかはみてるよ。」

スクナ「じゃあ、もし健康法をしているグループAとしていないグループBの平均寿命を調べた場合、平均寿命Bが長生きだとしたら？」

スサノオ「魂にはカルマという情報がつきまわっており、その健康法を現世で行うことはもう決定しているんだね」

スクナ「けど、この話を聞いてじゃあやーめたってなったら寿命って変わるんですか？」

スサノオ「もしそうしたことをやめてしまうと、もしかしたら寿命は減ってしまうかもしれないね。そうすると修行は前世よりも後退してしまうことになってしまう。この遅れを取り戻すのにはまた何回もの生まれ変わりをして修行し直さないといけなくなってしまう。だから、現世での精進というのはとても重要になるんだ」

スクナ「そうなんですか！それを聞いてやる気になってきました！」

スサノオ「とでも言うっておかないとみんなぐうたらしてしまうからね。」

スクナ「え？これも嘘なんですかね」

スサノオ「さあ、どうだろうね。こういうのは人智でははかりしれないことだから、その方の人生のプラスになるように考えていけばいいのさ。スクナ、お前が前向きに人生を進めるような考え方をしていけばいいんだよ」

スクナ「はい、わかりました！お師匠様！」

煩惱と菩薩

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言ってごらん」

スクナ「前回では長寿と魂の浄化について教えていただきましたが、坂本龍馬とか吉田松陰とか高杉晋作とか若くして亡くなっています。が、そういう方々というのはじゃあ、長寿の一般人よりも次元が低いことになるんですか？」

スサノオ「魂にステージをつけるってのは神秘家によくあることで、まあ確かに人格が優れているとか才能があるとか、個人差はあるね。魂自体は恐らく平等なんだけど、それを覆う煩惱によって制約が出てくると私は考えている。だから才能というものを開花させるのは、何かを付け足すのではなく、今ある煩惱による制限を取り去っていくことにあるとしているんだ。」

スサノオ「この煩惱というものはある段階になるとコントロールできるようになるんだね。煩惱とはマイナスのものというイメージが世間では強いけど、この宇宙には究極のところ、善も悪もないんだ。これは危険な思想につながってしまうから、全てを開示することはできないんだけど、そうなっている。そして煩惱もあるべくして存在しているんだね。」

スクナ「なんかお師匠様の言われていることは、世間の常識とは正反対な気がしますけど・・・」

スサノオ「無理もないね。我々は固定観念の世界で生きているからね。それを外して、宇宙の根本から考えることをあまりしない。ここからの霊的啓示を受けて行動するにはとんでもない苦が伴うため、それなりの能力が必要なんだけど、その能力がない場合はやはり固定観念の世界に埋没して生きた方をさせられてしまうんだ」

スクナ「なんか、分るような分らないような・・・」

スサノオ「まあ、煩惱というものは、その根本は無明にあるんだだけ

ど、単純ところでは食う・寝る・セックスするとかで、これがないと人間は肉体の維持が不可能になるから本能的なことなんだ。だから生命維持には必要だけど、これにとらわれる傾向があるんだ」

スクナ「だからコントロールをできないといけないんですね」

スサノオ「そうなんだ。で、話を戻すと、先ほどスクナの言った若くして死した幕末の崇高な魂を持った若者たちなのだが、彼らはもう一定の境地に確かに達している。本来ならもう生まれ変わりのないステージに入っているんだけど、ある時代の苦難に遭遇した時にわざわざこの世に煩惱の鎧を身に纏って生まれ変わってきたんだね。そして彼らは時代を回天させるためには死をも恐れることはなかった。そして役割が終わったときに命を天に帰したんだね。仏教で言うところの段階を『菩薩』と言ったんだ」

スクナ「幕末の英雄は菩薩だったんですね！」

スサノオ「さあ、どうだろうねwけど私にはそう感じてならないね、彼らの崇高な生き方は。」

スクナ「ボクもそう思います！」

スサノオ「前述とは矛盾するように感じるけど、寿命つてのはそういう意味では、それだけではその境地をはかれないんだ。菩薩の段階にはいつている存在にとっては、その人生で役割を果たしたかどうか寿命になってくるからね。けど、長寿することは凡夫のレベルでは清浄とも言ってもいい。煩惱が清浄化されて、そこから能力が開花し、この世で事を為す、そうした構造になっているんだね」

スクナ「心を清く正しくすれば、ボクも偉い人になれるんですね！」

スサノオ「偉い人になるためとか、出世するとかのために魂を清浄化するわけではないんだけどね、そもそもそれを望む事自体が煩惱なんだ。まあお前が悪い道に入らないよりはいいんだけどね」

スクナ「そっか」

スサノオ「それにただ魂の清浄化をすればいいってわけでもなく、それにはプロセスがあるんだ。それもまた話す事にするよ」

スクナ「はい、わかりました！お師匠様」

二つの才能

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言ってごらん」

スクナ「前回の話では、単純に長生きしたらよいつて訳でもないですね。けど、野心剥き出しでギラギラして煩惱だらけの人物でも大きなことをする方っていますよね？そういうのはどうなんですか？」

スサノオ「実は才能と言っても2種類のプロセスが存在しているんだ。一つは煩惱を強化して自我を強くすることで発揮される才能、もう一つは煩惱を滅して魂から発せられる才能。この2種類があるんだね」

スクナ「煩惱を強くすると才能が発揮されるんですか？」

スサノオ「ある一面の才能は、とでもしておこうか、これは専門家に多いパターンなんだ」

スクナ「確かに、その分野で大家になると偉そうな人っていますよね。ああいうの嫌いだな。一流になればなるほど人格も磨かれるはずですよ。」

スサノオ「これは文明の過渡期だから仕方のないことなんだね」

スクナ「まだまだ人類って未成熟なんですね」

スサノオ「残念ながらそうなんだ。けどこれも人類には必要な段階ではあるんだね。」

スクナ「確かに優れた技術を持っけていても使う方によっては、一方は人生を豊かにしますし、もう一方では戦争なんかに使われちゃいます」

スサノオ「そういうこともあるね。私の話つてのはもう少し言葉の整理をしないといけないんだけど、煩惱というのは心身両面で使っているんだ。そして自我つてのは主に精神面を意味している。この自我つてのは、デカルトが言う『我れ』という観念と思ってくれて

いいね」

スクナ「我、思う故に我あり」ですね！」

スサノオ「そのデカルトが『方法序説』というのを記し、そこで『分析』という考え方を発明したんだ。つまり明確なものと明確でないものを分けていき、明確なものだけを取り出していくと真理に近づくことができるという方法なんだ。結局はどれだけ分けても何も最後は存在しないかもしれないから、これは思想と言ってもよく、これは理性の思想なんだね。理性の役割というのは切断であり、物を事を明確に分けていく、そして自他をも分けていく、ここで自我が確立されるんだ。だからデカルトの思想は自我の思想なんだね。」

スクナ「なんか聞いていて、デカルトという人はあまりよい人に聞こえないですね」

スサノオ「そうでもないんだ、やはり人類が発展するにはデカルト的な考えが出てこないといけない。古代というのは自他もそうだし、分野なんかも非常に未分化な状態だったんだ。全てが混沌としており、これはこれで精密さが欠けて問題なんだね。呪術の中にも身体的効果のあるものや精神的効果のあるものが乱立しているんだけど、経験論的な効果なんかもあって複雑に絡んでいるんだ」

スクナ「なるほど、それを分けていくことは発展プロセスとしては必要なんですね」

スサノオ「そうなんだ。しっかりと分野が分かれており、そして最終的にはそれらが有機的に統合されてくるのが理想的だね。デカルトの時代は分野というものが分かれた。物質の法則は物理学、心理的法則は心理学とかね。これを物心二元論とか言うんだけど、元々東洋思想の物心一如という観念と対立するんだ。東洋は東洋で分らないものは全て気としてまとめたりして一元論を形成しているけど、やっぱりこれはこれで混沌としているんだね。ただし、東洋思想はそこに肉体的実践が伴っているんだ。だから思想自体は未分化のよう to 思えても、そこに何らかの直感的な体感が記されている。西洋思想とは違う部分ではあるんだね。西洋の理性の思想と東洋の身体

的実践の思想が統合されて、人類は次のステージに入るだろうね」
スクナ「しかし自我を強くするプロセスってのは本当に必要なんでしょうか？」

スサノオ「自我の確立は理性の発達とも関係しており、やはりこれは必要と見るべきなんだ。そして分野として切り離して、その分野をどこまでも追求する、しかしどこまでいっても見えてこないし、逆に壁にぶちあたるんだね。この体験が一定の諦観を生み、謙虚さを生み、他分野との融和に繋がっていくんだ」

スクナ「『実るほど、頭たれる稲穂かな』とか言いますもんね。本当にその道を極めた方というのは謙虚になるんだと思います」

スサノオ「そうだね。その段階を経ていない謙虚さは単なる謙遜でしかなく、偽善でしかないね。日本人はこうした観念を美德とする部分があるけど、ここを抜けていかないと世界では通用しないね。」

スクナ「『もつと我を出す』ってサッカーの本田選手が言っていますけど、これですよな？」

スサノオ「そうだね、確かに以心伝心という部分、空気を読むということに関しては日本人は優れているんだけど、言葉で自己表現するということに関しては弱いね。彼はその両方の能力を持ち合わせている。彼の活躍もそうなんだけど、こうした彼の人物像に注目が集まるということは、日本人の自我意識も次の段階に入るかもしれない。」

あの世の法則

スクナ「お師匠様、質問！」

スサノオ「なんだい、スクナ、言ってごらん」

スクナ「死後の世界ってどんな感じなんですか？」

スサノオ「まずスクナは死後の世界があるという前提で話しているんだね」

スクナ「あれ？死後の世界って存在しないんですか？」

スサノオ「それは人智ではあるともないとも断定できないね。けど万物には必ず陰陽の法則が貫いているから、『生の世界』を定義すると『死後の世界』を想定してもいいかもしれないね」

スクナ「そうなんです、それを前提としてなんです！」

スサノオ「わかったよ、そんなに知りたかったら話してあげよう」

スクナ「わーい！」

スサノオ「まず死後の世界、『この世』に対する『あの世』ってのは、先ほどの陰陽の法則で解釈すると、まったく正反対の世界なんだ」

スクナ「まったく想像が付きませんが、何がどう正反対なんですか？」

スサノオ「例えば重力解放されて、浮力だけの世界であつたり、この世とは逆さまになって生活していたりするんだ。まあ、逆さまと言ってもこの世から見て逆さまに見えるだけで、あちらの世界ではそれが普通だから、こちらの世界が逆さまだともあの世から見たら言えるんだけどね」

スクナ「逆さまなんですか？信じられません！」

スサノオ「赤ちゃんって逆子は別として逆さまに生まれてくるだろ？赤ん坊という存在はあの世と最も近い存在なんだね。この世で見えるあの世的な存在はそう確認できるんだ。これはそんな風に考える民族だっているね」

スクナ「ふむふむー。」

スサノオ「赤ちゃんって世界が逆さまに見えてるのは知ってるかい？」

スクナ「え？そうなんですか？」

スサノオ「赤ちゃんはこの世を逆さまに見てるんだ。これはあの世にいる名残なんだね。それに慣れるまでしばらくかかるんだ。つまり、赤ちゃんは生まれたときってのは、魂はまだあの世的なんだけど、この世に魂を適応させるのに時間が少しかかるんだね」

スクナ「そうだったんですか！」

スサノオ「さあ、どうだろね。実はこれにはちゃんと理由があって、我々もそうなんだけど、実は見る対象を水晶体を通してみると網膜には逆さに映るという物理的理由が存在するんだ。それを脳が調整しているんだね。」

スクナ「じゃあ、その事は、あの世は逆さまだって理由にならないんじゃないですか？」

スサノオ「そうでもない、科学というのはこの世の物質レベルを基準にした法則であって、あの世の霊魂レベルの法則からすると違うんだね。つまり物質レベルでは脳というものが認識を調整していると思われがちなんだけど、認識を調整するのは霊魂レベルではブツデイ（覚）という意識なんだ。」

スクナ「ふむふむー。確かに、脳に心があるってのが今の時代の常識ですけど、そうでもない気がしますしねー。」

スサノオ「心の存在場所の話もまたどこかでしょう。あの世ではレンズを通さなくてもいいから、ブツデイは逆さにする必要性がないんだね。だから逆さまなのは実はこの世なんだ」

スクナ「えええええ！そうだったのですか！」

スサノオ「って、気がするね」

スクナ「驚かせないでくださいよー。」

スサノオ「けど、その可能性は捨てきれないんだ。魂ってのはこれも受けるエネルギーが違うんだね。」

スクナ「エネルギー？」

スサノオ「そうなんだ。エネルギーには4種類あると科学では言われているんだけど、その一つに重力がある。これは空間の歪みでしかない説とかグラビトンという物質が存在するとか、色々と考え方はあるんだけど、とりあえずそういうのは置いておいて、魂が受けるのは重力全く正反対の力なんだ。」

スクナ「重力の反対というと浮力？」

スサノオ「そうだね。重力に対する斥力を受けて魂は上昇していくんだけど、あの世ではこの斥力が重力的な意味あいをもってくるんだ。つまり重力つてのが魂をこの世にとどめておく力、反重力はこの世から魂を離す力、逆に言うとな重力はあの世から切り離す力、反重力はあの世に魂をとどめておく力と言えるんだ。つまり全ての法則性を見る場合、この世とあの世の法則を総合しないと全ての法則性というのは見えてこないんだね」

スクナ「この世の見方に偏ってもいけないし、あの世の見方に偏ってもいけないですね！」

スサノオ「そうなんだ。科学者はこの世の法則を真理としているし、神秘家はあの世のことを本質としている。だから対立が生まれるんだね。これからの学問はそうした見える世界と見えない世界、色の世界と空の世界、形而下の世界と形而上の世界とを総合していく必要があるね」

スクナ「それをお師匠様はやられているわけなんですね！すごいな！」

スサノオ「私の命ある限りやろうとは思うのだが、こういうものは一代ではなかなかできないんだね。だからできる限り、私が悟ったことをスクナ、お前に伝えていくからよく聞くんだよ」

スクナ「はい、お師匠様！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090o/>

アーキタイプ・ストーリー ~ Archetype Story ~

2010年10月9日12時26分発行